双松会会報

第六号（「双松」通巻12号・「松高北高同窓会報」通巻第14号）

発行　松江市奥谷町164
島根県立松江北高等学校内　双松会事務局　TEL ㊀4888・㊁3633
印刷　有限会社　高浜印刷所　TEL ㊀3000

ご挨拶

会長　柴田午郎

この度双松会役員の改選期にあたり思いもかけず会長に再任されました。実は私は田舎の茅屋に、病妻と二人きりの生活をして居りますので、東京大阪など遠い所は勿論、地元松江の会合にさえ欠席がちにて、皆様にご迷惑をかけることが多く、かねて辞任を申出て居たのですが、どういう風の吹きまわしか、もう一度やれとのご連絡にて、適材でないとは知りながらお引受けした次第であります。何卒今後一層のご指導をお願い致します。

今や戦後四十年、先般臨教審の答申も出されて、教育界もこれから本格的な改変期に入ることと思われます。この方面にはいたって暗い私のこと故、あれこれ意見を述べることは出来ませんが、教育の自由化とか、個性化とか、或は共通一次試験の問題等等、教育界にとっては、あの六三三制の出来た当時以来の大波が、やがて押し寄せてくることでありましょう。新聞を見ますと、少年達のいじめの問題も大きく取扱かわれているようであります。

私ごとを申して恐縮ですが、私の孫がいま松江の幼稚園に通っています。毎日家へ帰ってから、近所の子供達と遊んでいますが、ある時間になりますと子供達はそれぞれの学習塾へ行って、孫はひとりぼっちになって了います。当然ぼくも塾へ行きたいと申しますので、この頃は母親が算数の塾へ時々つれてゆくようであります。ところが下に三歳の子供がいますので、一緒に塾へつれてゆきますが、塾の先生もなかなかの商売上手で、小さな子供も相手にして大喜びだそうです。

ところがその幼児達が、見真似聞き真似、手と足に指が十本づつ、合せて二十本の指を、口の中に入れながら、いつの間にか二十までの数を覚えるという話をききました。頭が覚えるのか口が覚えるのか分らぬ笑い話ですが、一体こんなに頭ばかり進んだ子供達が大きくなって、日本の行末はどうなるだろうか、といらぬ心配までしたくなります。今朝もテレビを見ていると、パソコン屋の店頭は子供でいっぱい。ひとりで二時間も三時間もねばっているようです。アナウンサーがきくと「ひとりで遊べるからおもしろい」と答えていました。

中国の言葉に「人生百に満たず、なお千歳の憂いを抱く」という言葉があるそうですが、千年とはいいませんが、もう十数年たてば二十一世紀です。この子供達が一人前になる頃には、日本という国は、いな世界の様相は一体どうなっているだろうか。と思うのも無理ではないような気が致します。

歳をとって、老齢年金を貰ったり、医療費を無料にしてもらったり、世間に迷惑をかけることばかりだと反省するこの頃ですが、この若い青少年達のことを思うと、せめて二十一世紀まで生きていて、この目で彼等の生きざまを確かめてみたいと思うのは、やはり胸に巣喰う野次馬根性のせいかもしれません。

二つのシンボル

学校長　三浦富登

「淡雪の流るる春日
花よ花咲きて誇らば
二本松天そそりたち
朝日さす丘を旅発て
ああ
りん　りん　りん
地平のかなた」

松江北高愛唱歌「赤山・ぐるりの唄」の一節であります。一昨年本校がNHK全国学校音楽コンクールにおいて最優秀賞を受賞した「祝ぎ唄」として卒業生の藤脇久稔先生から贈られたものです。作曲は北高とかかわりの深い島根大学の小林昭三先生が書いて下さいました。

このように多くの先輩や関係者の皆さんが、どんなにか北校を愛し後輩のすこやかな成長を願っておられることか、こんな素晴らしい学校は他にはないとしみじみ感じる次第です。

この歌にもありますように、北校のシンボルであります二本松は、先輩の方々の母校への思いをよく知ってのことか太い幹に緑の枝葉を茂らせて、何もかも知りつくした赤山の主のように泰然とした姿で私達を見守っています。

私はいつも下の石段に腰をおろしてこの松に百十年の北高の歴史をゆっくり聞いてみたい、そして後に続く若者の教育がこれでよいかと問ねてみたいと思うのです。所詮かなわぬことではありますが、念ずればいつかは聞えてくるような気がしてならないのです。

「一、校旗ハ常ニ所定ノ室ニ
置キ其ノ出シ入レハ校長
必ス之ヲナスモノトス
一、・・・・・・・・・・」

これは明治四十年五月十六日に制定された校旗規程であります。

学校で最も重要な儀式である入学式と卒業式には、どこの学校でも必ず校旗を式台に飾ります。北高は他の学校とちがい二本の校旗を飾ることにしています。一本は新制高校になってからの校旗であり、他の一本は旧制中学校の⊕印の校旗であります。

島根県立第一中学校を象徴するであろうこの校旗の由来については、失礼ながら詳しく承知していませんが、古めかしいこの校旗をわざわざ飾る理由は教職員、生徒一同が厳粛な儀式の中で、光輝ある歴史と伝統を継承する決意と誇りを新たにしようとの考えによるものであります。

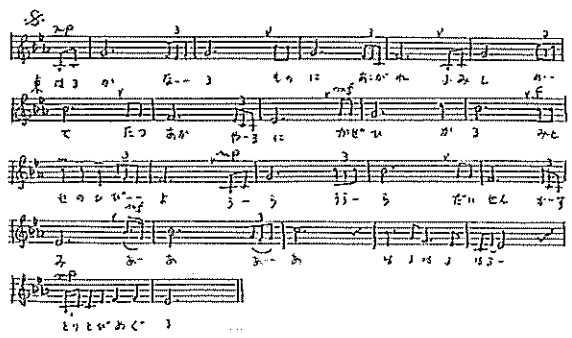
この校旗は、二つの儀式のほかは毎年卒業後五十年目に開かれる同級生会の折に、卒業生の皆さんと一緒に写真に収まり追憶の輪を一層広める役割も果しています。

私はこの貫禄のある校旗にも問いかけてみたい数々のことがあります。しかしながら、こちらの方は二本松とちがい老朽化が目立ち、答えてくれそうにありませんし動かすこと自体が無理な状態にあります。

かっての校旗規程に違反することになりますが、こちらの方は起雲館の資料室に展示し、新しく⊕の校旗を作製し、先輩の心をいつまでも伝えていきたいと願っているのですがいかがなものでしょうか。

新愛唱歌贈らる

赤山・ぐるりの唄



詞　藤脇久稔
曲　小林昭三

東

遥かなる存在に憧れ
ふみしめて佇つ赤山に
風ひかる三年の日々よ
うらうらら大山霞み
ああ
ゆる　ゆる　ゆる
鳥とびめぐる

南

深みどり亀田の城は
雲八雲宍道湖に映え
天空へ鯱翔いのぼる
頬紅き胸のたかぶり
ああ
ひろびろ　ひろびろ
無限をおよぐ

西

法吉鳥伝説の谷に
啼く交わす声は空しく
時節うつり露置くばかり
悲しかりうら若くして
ああ
しん　しん
星降りしきる

北

淡雪の流るる春日
花よ花咲きて誇らば
二本松天そそりたち
朝日さす丘を旅発て
ああ
りん　りん
地平のかなた

松くい虫

今春は、北高の新しい愛唱歌として、「赤山ぐるりの唄」の御恵贈にあずかった。作詞は、本校の卒業生であり、旧職員である藤脇久稔先生、作曲は、島大教授の小林昭三先生である。恒例の定期演奏会には早速披露させていただいたが、詞曲ともに清新の詩情に満ち、赤山を包む四季の自然の息吹、赤山に学ぶ若者の瞳の輝き、胸のたかぶりが渾然となって伝わってくる珠玉の青春譜である。「赤山ぐるりの唄」が双松のごとく赤山の大地に深く根をおろし、末長く愛唱されることを望むや切である。

最近は、その二本松も、ことに樹勢がよく、翠色も濃く見事である。昨秋、病害虫に冒されないよう、根元の土を柔らかく解きほぐし、養、水分の吸収率を高めた効果であろうか、したたるような緑である。その緑陰で、今年も、五月には昭和十年卒の第55期、六月には、昭和十四年卒の第59期の方々の集いがあった。いずれも、なつかしき校旗のもとでの意気軒昂たる懐旧の集いであった。

さて、今春の大学入試は、合格者延数は昨年度に及ばなかったものの、質的な向上は、近年に例を見ぬほどめざましいものがあった。また、部活動においても、六月の県高校総合体育大会では、男女総合、男子総合ともに三位の好成績で、昨年度の失地を大幅に奪回し、今後の総合優勝の地盤を固めることができたように思われる。特に、漕艇の男女の優勝はお家芸としても、剣道の男子の初優勝はまさに快挙であった。今年の秋深まる頃には、再び合唱部の全国学校音楽コンクールでの全国制覇を実現したいものである。

「文武両道」は北高生の背負う宿命であろう。今夏も汗をしたたらせての演習授業が始まっている。野球部も県大会への挑戦開始。体育系各部のインターハイでの活躍も期待される。「赤山ぐるりの唄」を引くならば、「花よ花咲きて誇らば」、北高生よ、凜々として、「二本松天そそり立ち　朝日さす丘を旅発て」と呼びかけたい思いしきりである。

昭和六十年度 第一回役員会開催

本年度の役員会は、常任監事五十三名、校内幹事十二名の出席を得て、去る六月十三日(木)に一文字屋ホテルを会場に開催された。

会議は庄司保親副会長、三浦富登学校長の挨拶にひきつづいて、庄司副会長を議長に選出し、次の議題について慎重な審議が行われ、全て原案通り承認されました。

一、会務報告
一、昭和五十九年度会計決算承認並びに監査報告
一、昭和六十年度予算審議
一、役員改選
一、「双松」名簿刊行

昭和59年度 会務報告

○会議等

昭和59年
5月25日　役員会（一文字屋ホテルにて）
　　会務報告・昭和58年度会計決算
　　昭和59年度会計予算
　　各期代表80名出席
7月8日　東部双松会（安来商工会議所にて）　安来能義地区50名出席
　　本部出席者　大田教頭・吉野
10月1日　会報発行・発送
12月1日　東京双松会（有楽町「日本クラブ」にて）　80名出席
　　本部出席者　大田教頭・後藤
11月27日　近畿双松会（島菊にて）　60名出席
　　本部出席者　大田教頭・春木キ
昭和60年
2月11日　米子双松会（米子ホテルにて）　40名出席
　　本部出席者　大田教頭・庄司

新双松会役員

会長　柴田午郎　44期
　　能義郡伯太町東母里四八三
副会長　森鵬善夫　45期
　　川崎市麻生区王禅寺六六三―七〇（松江市和田見町二三）
　　庄司保親　50期
　　境港市渡町二二二八
　　兼折博　52期
　　松江市北田町六九
　　森本正紀　53期
　　松江市雑賀本町五八
　　並河純　64期
　　安来市安来町一六八九
　　森本暉一　期
　　松江市新雑賀町二―二一
幹事長　三浦富登（松江北高校長）
　　松江市奥谷町一六四　北高内
　　馬場純一　44期
　　松江市内中原町一七七
監事　吉岡俊雄　63期
　　松江市八雲台一―一五―二三
　　岩井秀夫　2期
　　松江市東本町二―一六

昭和60年度 双松会会計予算書

〈収入〉

費目	予算額	前予算額	増減△	説明
入会金	1,997,000	2,160,000	△163,000	会員 1,065×150×12 通信 80×1,000
繰入金	450,000	724,250	△274,250	百周年記念基金 200,000 名簿会計250,000
繰越金	780,795	393,101	387,694	前年度からの繰越金
雑入	5,205	5,649	△ 444	預金利息
合計	3,233,000	3,283,000	△ 50,000	

〈支出〉

費目	予算額	前予算額	増減△	説明
会議費	350,000	400,000	△50,000	地区・各期総会役員会補助
印刷費	390,000	390,000	0	会報・封筒・葉書等印刷
通信事務	1,350,000	1,300,000	50,000	会報発送
記念品費	400,000	400,000	0	60年度卒業生記念品代
旅費	250,000	300,000	△50,000	各地区総会への本部役員旅費
人件費	160,000	160,000	0	会報発送作業アルバイト代
記念事業	200,000	200,000	0	二本松養成費・芝蘭室充実費等
雑費	100,000	100,000	0	慶弔費等
予備費	33,000	33,000	0	
合計	3,233,000	3,283,000	△50,000	

昭和59年度 双松会会計決算書

収入総額　3,360,339円
支出総額　2,579,544円
残額　780,795円

〈収入〉

費目	予算額	決算額	増減△	説明
入会金	2,160,000	2,137,400	△22,600	会員 繰13,756×150 通信 74×1,000
繰入金	724,250	724,250	0	百周年記念基金 200,000 名簿会計524,250
繰越金	393,101	394,406	1,305	前年度からの繰越金
雑入	5,649	104,283	98,634	預金利息 寄付金
合計	3,283,000	3,360,339	77,339	

〈支出〉

費目	予算額	決算額	増減△	説明
会議費	400,000	243,224	156,776	地区・各期総会役員会補助
印刷費	390,000	220,000	170,000	会報・封筒・葉書等印刷
通信事務	1,300,000	1,294,790	5,210	会報発送
記念品費	400,000	376,350	23,650	59年度卒業生記念品代
旅費	300,000	197,070	102,930	各地区総会への本部役員旅費
人件費	160,000	0	160,000	会報発送作業アルバイト代
記念事業	200,000	180,000	20,000	二本松養成費・芝蘭室充実費等
雑費	100,000	68,110	31,890	慶弔費等
予備費	33,000	0	33,000	
合計	3,283,000	2,579,544	703,456	

今春の進路状況

今春の現役、浪人生の進路状況は、別表の60年3月の欄のとおりです。新しい教育課程となって第一回目の卒業生のため、特に現役生の動向には注目しておりましたが、立派な成果をあげてくれました。

国公立大学合格者の総数は、女子の短大指向の急増等で若干減りましたが、北は東北大学から南は九州大学まで各地の大学で合格者を出しました。特に東京大学の現役五名、浪人と合わせて総数七名と京都大学の現浪合わせて十九名の人数は、最近にない多い人数で教職員一同喜ぶと共に生徒諸君の健闘をたたえました。

私立大学関係も、今春は東京方面で想像以上の激戦となりましたが、早稲田大学二十五名、慶応大学十八名、明治大学十五名など素晴しい戦績だったと思います。最近、前記の三大学を含むかなりの数の著名私立大学から指定校としての推薦入学生の募集依頼を受けるようになりました。毎年先輩達の数多い合格が続いていること、入学後の学業成績などが良好であることによる推薦依頼であることは明白で、先輩達に感謝すると共に、進路指導は一過性のものであってはならず長期的展望が必要であること、大学入学後の卒業生諸君とも連絡をとり合う体制をつくることを痛感しております。

短期大学では、地元の島根県立女子短大二十二名、京都女子大学短期大学部十名、鳥取大学医療技術短大七名など国・公・私立を問わず女子の進学が急増の状況にあります。各地の短期大学の特色、就職状況などの把握が、進路指導部の急務となってきました。

就職希望者も漸増の状況にありまして、今春も国家公務員四名、地方公務員五名、金融機関四名など就職希望者二十九名全員が、ほぼ希望どおりの職場に就職しました。

今春の進学結果につきましては、各種週刊誌が特集したこともありまして、各方面から進路指導部や個人の教師に電話、手紙などでおほめの言葉や、激励の言葉をいただき嬉しく思いました。就職につきましても、先輩各位のご支援で決定したものもあり、心から感謝申しあげます。

松江東高校の開校にともないまして、ながく続いた一学年十クラス時代の進路概況の報告は今回で最後となり、来年からは八クラス時代の成果の報告となります。より緻密な進路指導と教科指導の内容の精選による実力アップ、マンツーマンの個人指導等で、内容的にも数字的にも過去の栄光に近い成果をめざして、学校全体で頑張りますので、卒業生の皆様にはかわらないご支援、ご指導を切にお願い申しあげます。

	57年3月			58年3月			59年3月			60年3月		
	現	卒	計	現	卒	計	現	卒	計	現	卒	計
国立大学	185	50	235	175	61	236	163	63	226	131	71	202
公立大学	7	6	13	14	5	19	17	9	26	7	3	10
私立大学	214	145	359	171	137	308	188	186	374	115	203	318
短期大学	87	7	94	122	1	123	83	6	89	145	1	146
その他	35	1	36	42	2	44	44	4	48	38	1	39
合計	528	209	737	524	206	730	495	268	763	436	279	715

《通信制より》

通信制同窓会長　藤原万也

◎昭和60年3月17日、59年度通信制卒業式。一般生31、集団生43、計74名がわが会員となった。一昨年の卒業式以来、卒業証書は校長先生より一人ひとり直接手渡されるようになっている。卒業生諸君の感激も一入であろう。なお今年も全日制のブラスバンド部と合唱部に花を添えて頂いた。(入学式も)。式終了後柔剣道場で、同窓会入会式があり、森本双松会副会長、野津通信制同窓会副会長が歓迎の言葉を送り、記念品贈呈、浜村君が全員を代表して謝辞を述べ、先輩も列席して後輩の入会を祝った。

なおこれにより卒業生総数は一九七二名となった。

◎60年度入学式は4月13日。入学生の内訳は以下の通りである。一般生五二、集団の中、大和紡一一、去年より始まった技連の玉木建設建築コース一五、日立機械科二五、松江衛看三、雲南衛看九、それに転編入生三二が極めて特徴的である。なお能義衛看は前年度卒業生で今年度は零となり、出雲准看は4年生七名が頑張っているが、これも今年度卒業をもっておわりとなる。なお施設についてであるが今年度2階に通信制専用教室一つを得、専用教室は計四となったとのこと。

◎7月14日松江婦人会館にて60年度役員会開催。役員の出席は12名。出席予定の徳田副会長は豪雨の為那賀郡弥栄村の県道が分断され欠席。学校からは塚本教頭、後藤、田村の各先生が出席。59年度決算報告、山本善吉監事の監査報告後、決算承認。60年度予算案審議では、全国定通球技大会に補助をする件について動機が出され、5万円の補助をすることに決定。因みに昨年度は3万円。その他は重要案件もなく、議事はスンナリ終了した。決算表、予算表については別表を参照されたし。以後懇親会に移り、塚本教頭の学校現況報告などがあり、それからおよそ2時間、通信教育の懐旧談で座は大いに賑わった。

◎この会報がお手元に達した頃には全国定通球技大会の結果が既に決まっているはずである。今年のわが後輩達の活躍は如何であったろうか。

昭和59年度決算算

〈収入〉　(59.4.1～60.3.31)

費目	小分類	予算額	決算額	差引増減	摘要
繰越	繰越	352,076	352,076		
	計	352,076	352,076		
会費	新入会費	180,000	148,000		74名×2,000
	計	180,000	148,000		
雑収入	雑収入	5,000	7,391		普通利息 2,111
	計	5,000	7,391		定期 〃 5,280
合計		537,076	507,467		

〈支出〉

費目	小分類	予算額	決算額	差引増減	摘要
会議費	総会費	0	0		
	役員会費	100,000	46,714		
	地域会議費	100,000	20,430		
	計	200,000	67,144		
事業費	会誌発行	0	0		
	計	0	0		
事務費	事務費	100,000	8,150		
	計	100,000	8,150		
雑費	雑費	200,000	76,035		
	計	200,000	76,035		
予備費	予備費	37,076	0		
	計	37,076	0		
積立金					
合計		537,076	151,329		

507,467－151,329＝356,138(繰越)

昭和60年度予算書

〈収入〉　(60.4.1～61.3.31)

費目	小分類	予算額	摘要
繰越	繰越	356,138	
	計	356,138	
会費	新入会費	180,000	90名×2,000
	計	180,000	
雑収入	雑収入	5,000	
	計	5,000	
合計		541,138	

〈支出〉

費目	小分類	予算額	摘要
会議費	総会費	0	
	役員会費	100,000	
	地域会議費	100,000	
	計	200,000	
事業費	会誌発行	0	
	計	0	
事務費	事務費	50,000	
	計	50,000	
雑費	雑費	200,000	
	計	200,000	
予備費	予備費	91,138	
	計	91,138	
合計		541,138	

百年史補遺 (五)

漕艇部（その四）

昭和二十七年度は、前年までの赤山松江中学の時代が終り、ボートも新制中学、新制高校「松高」時代が始まった年で、節目に当る。しかし、それだけにボートの先輩は戦後五年間築いてきた全国Aクラスの座を維持すべく、将に献身的な援助と指導をした。学校もこの先輩の熱意と、ボートの実績から、念願の艇を桑野造船所から購入し「朝風」と命名した。

この年には大先輩井上伝助氏の発想により、毎日新聞社と共催で「全山陰ロングレース」を、加藤義勝（六十八期）と袖本監督とで企画し、大海崎沖から松江大橋までの一万米で六月十五日行われた。六千五百米までリードし乍ら、米子南に次いで二位、以下米子西・境・米子東の結果となった。しかし、七月の境レガッタで優勝、続いて松江の全山陰ボートレース大会でも優勝、更に京都堀川高校との第三回定期戦を大橋川で行い三連勝、着々と力もつけ、琵琶湖大会を改めた全国高校選手権大会に臨んだ。大会前、瀬田川での練習で、同志社大学のエイトと並べたところ、松高のフォクスが同じ様に走り、大学生を驚かす程の好調であった、処が伏兵宇和島東に敗れ、宇和島東に優勝を許した。力では宇和島を上廻るものを持ち乍ら優勝を逸したことは、今後の課題を暗示するもので、この年は大会毎に漕手が変り、国体に於ては、新人高根弘志を入れ、黒田方辰のコーチ、采配で悪戦苦闘し乍ら六位入賞を果したが、松高の国体での上位入賞はこれでしばらく跡絶えることになる。

黒田方辰君は戦後の漕艇史「力漕十年」で「精神的な面、技術的な面に於ても新しい時代への過渡期として、指導的立場にある者は従来のやり方を大きく回転させる必要を生じ……」と述べている。この中で力漕しボート松江の伝統を継承したのは、野津宣弘、折坂興、今岡一郎、加藤穣司、上山根雅之、石橋良治、高根弘志、岸田早苗、安部英輔、奥村賢二の諸君であった。

60年総合体育大会終わる
男女総合　三位
伝統の力を発揮

昭和六十年度の総合体育大会は前期が五月三十一日から、後期は六月七日から松江・出雲など四地区で開催され、北高からも総勢四〇〇余名の選手が参加しました。昨年度は、一昨年の男女総合優勝から一気に九位と転落しているだけに、今年はより一層の奮起がのぞまれました。大会に先立ち、五月二十九日には結団式が行われ、教頭より「質実剛健」の校風の由来についての話があり、諸先輩の築かれた栄光に恥ない活躍がのぞまれた。

出場選手はこの期待によくこたえ、男子剣道部の初優勝、ボート部男女アベック優勝をはじめ、各種目ともてる力を十二分に発揮し、男女総合三位という成績を収めました。

この内、陸上、軟式庭球、剣道、ボート、アーチェリーは、八月上旬に石川県を中心に開催されるインターハイに出場しますが、全国の強豪を相手に活躍してくれることを期待します。

総合体育大会での成績の詳細は左記のとおりです。

男女総合成績　第三位（53点）
男子総合成績　第三位（37点）
女子総合成績　第七位（16点）

陸上競技部
男子八〇〇M　三位　中島
〃　一五〇〇M　四位　中島
〃　一一〇MH　三位　黒田
〃　〃　四位　青木
〃　三段跳　優勝　青木
〃　一六〇〇MR　四位
女子二〇〇M　六位　金山
〃　四〇〇M　優勝　金山
〃　〃　四位　江口
〃　八〇〇M　二位　江口
〃　三〇〇〇M　二位　江口
〃　一〇〇MH　四位　安達
〃　走幅跳　四位　山本
〃　円盤投　二位　赤名
〃　〃　五位　原

軟式庭球部
男子ダブルス　ベスト8　野津・矢田

ボート部
男子SF　優勝
〃　SS　優勝
女子KF　優勝

バドミントン部
男子団体　三位
〃　シングルス　三位　吉岡
〃　ダブルス　三位　吉岡・加茂

硬式庭球部
男子シングルス　ベスト8　小林
女子団体　三位
〃　ダブルス　ベスト8　長岡・大津
金田・佐藤

バレー部
男子　ベスト8

柔道部
団体　三位
個人（軽重量級）　青山
〃（〃）　ベスト8　吾郷
〃（重量級）　〃　任田

バスケットボール部
男子　ベスト8　二位

弓道部
男子団体　優勝

剣道部
男子団体　ベスト8
〃　個人　小西・大田

水泳部
男子一〇〇M自由形　四位　長見
〃　二〇〇M　〃　四位　長見
〃　四〇〇M　〃　六位　吉岡
〃　二位　塩冶
男子四〇〇M自由形　四位　馬庭
〃　一五〇〇M〃　優勝　塩冶
〃　〃　三位　大久
〃　一〇〇M平泳ぎ　五位　昌子
〃　一〇〇Mバタフライ　六位　川西
〃　二〇〇M　〃　五位　川西
〃　一〇〇M背泳ぎ　四位　福井
〃　〃　五位　鈴木
〃　二〇〇M　〃　三位　福井
〃　〃　四位　鈴木
〃　〃　五位　岩井
〃　二〇〇M個人メドレー　六位　福井
〃　四〇〇M　〃　五位　吉岡
〃　〃　六位　福井
〃　四〇〇MR　五位
〃　八〇〇MR　五位
〃　四〇〇Mメドレー R　五位
女子四〇〇M自由形　二位　高木
〃　一〇〇M背泳ぎ　優勝　三島
〃　二〇〇M　〃　優勝　三島

文武不岐、学業一致で
北高剣道部の真価を世に問う

昭和四十年度剣道部主将
大西弘悦

昨年の総体をベスト8で終り、来年こそは必ず全国の舞台に出ようと部員一人一人と固い約束をしてから一年が過ぎた。

六月九日総体剣道優勝戦、横田高校に大将小西が鮮かに面を決めた瞬間、二十三年目にしてついに悲願の初優勝を遂げる。選手、応援団を問わず熱いものがぐっと込みあげてくる。

私もこらえていたが、いつしか熱いものが……。

想えばあの厳寒の中、氷つく道場を血潮で温め、又あの炎熱たぎる真夏の猛稽古に誰一人として不満を漏らさず、むしろ主将小西を中心に自ら進んで辛い修練の場を選び、そして求め努力してきた後輩達に大なる拍手を贈ってやりたい。

私の指導信念として剣道だけ強くては何もならない。

剣道を通じて真のリーダーとなり、世の中に出た時、立派に人を引っ張っていける人間に育ってほしい。

今、辛い修業をしているのは、その為なのだ……、その気持を後輩達は良く理解してくれ、学業の方も岩井部長が太鼓判を押す程しっかりやっている。

そういう意味でも今大会で北高が優勝した事は大きな意義があったように思う。

なまじ中学校の有力選手を集め剣道を専門でやっている学校に負けじと敢然と立ち向い立派に勝ち、正しい剣道が小細工剣道を打ちのめし、県下トップの進学校でも高校剣道界の頂点になれた事は、後輩達の将来に大きな自信と誇りを植えつけたと信じる。

北高剣道部の若武者よ、いつの日か剣道部での三春を語る時、涙は胸にあふれる事であろう。

一層の精進研讃を望む　完

ボート部伝統の力を発揮
朝日レガッタで準優勝　総体で男女総合優勝

今年のゴールデンウィークは珍しく好天続きだった。ボートシーズンの幕開けを告げる恒例の朝日レガッタも、新緑のまぶしい琵琶湖漕艇場において、五月三日からの三日間、絶好のボート日和に恵まれて競技が行われた。数年来、毎年のように風雨に悩まされたものであったが、今年は各クルーとも日頃の練習の成果を十分に発揮できた様子で、初日の予選から好レースが展開された。

我が北高漕艇部は、男子シェルフォアと女子ナックルフォアの二種目に出漕した。男子は、春先の漕ぎ込み不足から全体のリズムがまだ整わないうちに試合を迎え、予選で瀬田工など強豪と当たったこともあって、わずか〇・四秒差で準決勝進出を阻まれ、初戦で涙をのんだ。一方、女子は昨年の全国総体・国体の主力がそのまま残って、気力、体力、漕法、チームワークいずれも一段と進歩したクルーで、試合前からコーチらにある程度の期待を抱かせていたものである。

予選では、地元の強豪八幡商を抑えて、全クルー中一位の記録で勝ち進んだ。準決勝でも強豪八百津（岐阜）に楽勝して、いよいよ決勝に期待が集まった。決勝はさすがにいずれ劣らぬ強豪がそろったが、北高も名前においてはひけをとらない。前日までの戦いから自信を得た選手もあわよくばと闘志を秘めていた。スタート間もなく二レーンの北高と三レーンの本荘（秋田）が前に出てトップを争った。コンスタント漕ぎ（スパートをかけない常態漕ぎ）で力強さに勝る北高は徐々に本荘を離し、九〇〇メートル付近までトップに立った。しかし、さすがに力尽きたか、本荘のラストスパートをかわすことができず、最後、⅓艇身ほどで本荘に続いた。場内を沸かした大熱戦ではあったが、優勝を目前にしての、まことに惜しいレースであった。周囲も選手達も可能性十分と考えていただけに、悔しさが先に立ってしまうのである。ゴールを目前にしての勝利がいかに難しいか、あらためて感じさせられた試合でもあった。

ともあれ、全国規模の大会で準優勝したことは、女子クルーはもとより、北高漕艇部全体に大きな自信と励みを与えてくれた。それが、六月の県総体における男女総合優勝を導き、中国高校大会における男子の優勝につながったと思う。今は、男女とも八月の全国総体（石川県）入賞を目指し、また女子は鳥取国体入賞をもねらって以前に増して練習に励む毎日である。

最後になりましたが、北高漕艇部がここまで活躍できるようになったのも、ひとえに先輩の皆様方による直接・間接の御指導と御支援の賜であり、厚く御礼申し上げるとともに、今後ともより一層の御支援を下さいますよう心よりお願い申し上げる次第です。

（漕艇部顧問　渡辺達也）

昭和六十年度学園祭の開催迫る

統一テーマ「刻め自分を……この瞬間に」

期日　文化祭　九月七日(金)　八日(土)
　　体育祭　九月九日(日)　雨天順延

文化祭
○北高生の主張
○文化部各部の展示、発表
○バザー、お茶席
○音楽会
○北高コンサート
○2年ルーム出し物
○映画会
○アフリカ救援バザー他

体育祭
○競技
○北高ページェント（旧仮装行列）
○フィナーレ（ソーダ節等）

本年度の学園祭は前記のような日程で開催されます。既に五月初旬から生徒会執行部を中心に具体的な企画、立案を進めており、八月下旬から本格的な準備作業に入る予定になっています。内容は昨年とほぼ同じですが、統一テーマにあるように、自分達の心の中に学園祭というものの思い出を、しっかりと残し、この学園祭で燃焼しようとはりきっています。特に、現代の若者は何を考え、何をすべきか、などを自由に述べ、自分達を見つめ直すために「北高生の主張」を学園祭の中心としました。また、アフリカの状態を考え、また少しでも役に立てばということで「アフリカ救援バザー」を本年度は新しく企画しました。その他、演劇、音楽会、お茶席など、盛りだくさんの催し物を準備しております。

また体育祭のページェント（旧仮装行列）、フィナーレ（旧終末行事）などは、昔からの伝統を受けつぎつつ、新しい生徒の感覚で、より一層充実させたいと思っています。

当日は諸先輩にとっては懐しい赤山の地を訪れていただき、後輩の活躍をご覧いただきますように、ご案内いたします。

各期だより

松中四十七期（昭和二年卒）

藤岡　茂

本年は御蔭様で皆喜寿を迎えました。中には既に喜寿をすぎて八十路に向って進んで居られる人もあり誠に喜びに堪えません。現在、物故者は八十一名、生存者は五十七名で段々と減る率が多くなることは淋しい限りです。

来年は早くも松中卒業六十周年を迎えますので、いろいろの記念行事の計画を進めており、盛大にやりたいと思っておりますので、格別の御協力をお願いします。

日時　昭和六十一年四月五日（土曜日）午後五時より

会場　松江市東茶町　ときわ旅館

電話　（〇八五二―二一―二〇三九）

記念撮影。会誌「赤山の想い出」記念号発刊、四百字詰原稿用紙三枚以内。〆切　昭和六十一年二月末日。全員の投稿をお待ちしています。尚、記念同窓会には多数御参加を特に御願いします。

松中五十三期（昭和八年卒）

田辺　彊

十六年振りに行われた水郷松江の伝統行事ホーランエンヤ（城山稲荷神社神幸祭）は擢（かい）伝馬船、神輿（みこし）船など百隻を超える大船団が五月十八日渡御祭で壮大なる水上絵巻を展開、二十六日還御祭で幕を閉じた。

久方振りの祭りで市民の反応はまちまちであり、座談会の意見もまちまちのようである。いずれにしても今後やるとなれば、まず地元の皆さんの御諒解を得て、一大イベントとして観光資源を十二年振りと言わず、数年間で実施して貰いたいものである。さて余談はおいて……。当日は五三会の総会が正午より大橋川畔の臨水亭で開催された。一番乗りは東京より馳せ参じた福田弥次郎君（美保関町出身）、若かりし頃漕艇部でコックスとして活躍しており船行事となれば感慨深きものがあろう。そしてやはり東京より松浦亮君（揖屋町出身）、逐次会員が参集する。大橋川では擢伝馬船、供奉船が入れ乱れて一大絵巻を展開している。福富地区の奉供船上より帽子をとり合図をする野津一郎君、彼も昔漕艇部で一番を漕いでいた強者である。

やがて正午の合図のもと記念撮影に入る。参集者二十七名。昨年中に亡くなった会員五名に対し黙祷、そして恒例の総会を実施した。

当日の決定事項は

(1)　明六十一年は学校創立百十周年である。学校当局ではA案（五月二十三日、二十四日学校創立記念日）、B案（九月五日、六日学園祭）が企画されているがまだ決定されてない。したがって五三会総会もこれに合せて実施したい。為に後報する。

(2)　役員改選は全員留任となった。

やがて祝宴となり、NHKで有名な荒木八洲雄氏のドジョウ掬い等賑やかに明年の再会を期して終了した。

我々五三会員は豪放磊落な第二〇代校長須貝太郎氏提唱『大気分』即ち生徒悉く選手たれ、スポーツの気持で勉強しろと大いにハッパをかけられたものである。

我々は昭和二年十一月二十二日『中等学校規則』の改正、同日文部次官通牒で中等学校入学選抜方法に関する準則を示され、内申書重視による選抜方式により入学した第一期生である。試験制度ではなく五年間考査制度で暮したものである。スポーツでは県下で殆んど優勝している。勉学も大いに振興した。

そして五十二年経過した現状は次の通りである。

					運動部員										非部員
					野球	庭球	籠球	排球	陸上	水泳	短艇	柔道	剣道	計	
(A)	受験者総数	329名													
(B)	入学者数	191名		58.0%											
(C)	卒業者数（進学を含む）	162名	(C)／(B)	54.8%											
(D)	戦(病)者数	17名													
	死亡者数	63名	(D)／(C)	38.9%	2	0	1	4	4	1	3	4	0	19	44
	不明者数	5名													
(E)	生存者数	77名	(E)／(C)	47.5%	2	7	4	3	2	6	5	2	2	33	44

松高五期（昭和二十九年卒）

原　美治

昭和六十年七月十五日（月）快晴、梅雨明け。加藤穣司君（川鉄物産）の電話で五月五日渋谷で開かれた松五会の様子、出席者五十余名、一・二次会共盛況の趣、例の圧倒されるような声で聞く。ベネチアから打った祝電ついたかや？

五十路を迎え三年に一度の松五会も毎年開催とし、来年は木佐君（東京空港交通）が幹事の由。松江から女性三名が上京参加されたが、昨年八月卒業三十年を記念して恩師多数ご列席いただき一畑ホテルで開催した五期会は東京勢に多数参加していただいたことを思い出す。

正午、足立（日新ホーム社長）、高橋（松相銀庶務課長）、小玉（和幸電通専務）の三君と昼食をとり乍ら、夜は西川（旧姓熊沢）山口（旧姓古満）両女史に囲まれて校内幹事の田村君から依頼の名簿最終校正。夕方には母衣町で往診中の信太君に出逢い、病臥中の我らがエース園山君の近況を伺う。スーパーで竹内（旧姓本郷）女史に遭遇、お互に孫の溺愛話を。板垣君（一畑百貨店洋品課長）には洋服を届けて頂く。遠くなった三春が意外に身近で動く。

寄稿

ああ！　山本幡男君（その二）

松中四十六期　田平　弐

「今通訳をしている。三ヵ月もすれば帰れるだろう」と鉛筆で走り書きしたのを満鉄の社員が留守宅のもじみさんに届けて呉れたのは終戦直後牡丹江の捕虜収容所にいた頃のことだった。

だが運命の指針は大きく狂い、帰国どころか特務機関にいたばかりに戦犯をして矯正労働二十五年の宣告を受け、遠くウラル山脈の東スウェルドロフスクの収容所に送られて強制労働させられたのだった。一方的な欠席裁判で抗議のしようもない。

「とても生きて故国の土は踏めない。ここで死んで白樺のこやしになってしまうんだ。」こう考える悲観論者達を収容所ではいみじくも「白樺派」と呼んでいたが、幡男君は新聞を読んではあらゆる情勢を判断して、とかく帰国の望みを失い、絶望と虚夢の淵に沈もうとする人たちを励まし力づけ希望を与えることを忘れないロマンティストだった。

海原の沖辺にともし漁る灯は
明してともせ大和島見

これはいよいよ帰国の日に備えて詠んだ短歌だった。収容所の薄暗いバラックの一隅に坐って

「ほら、まだ海上は暗いけどあちこちに点々とまばたいているのは漁り灯だよ、じっと見つめてごらん、ほのかに黒く見える山々はまちがいなく祖国の山々だよ！　ほら！　みんな甲板に出て呟一つきこえない、「ワァッ！　いいなあ！　素晴らしいナァ！」

帰国の感激！　人々は幡男君の声に聞き惚れている。義侠心があり人一倍やせ我慢も強かったが、彼はいつも夢と希望を失わぬ善意の人だった。

幡男君はロシア語に堪能なので文化部で壁新聞を担当していたが、みずから北暝子（後は帰国を念じて国南子と改めたが）と号して、俳句の同好者を果めて「アムール句会」を主宰していた。収容所では収容者の集会は公式に認められていた訳ではないから、夕食または昼食後の休憩時間を利用してバラックの片隅や芝生に寝転んでそれとなく句会がもたれ、会員がそれぞれ作品を持ちより、相互に批評鑑賞し最後に幡男君の指導を受けていたが、今日何点がつけて貰えるかが楽しみで、のち幡男君の遺言を遺族に伝えるためノート十五ページにぎっしり書いてあるのを手分けして暗記してくれたのがこのアムール会の会員たちで、病中の面倒まで見てくれたことからも幡男君とこのアムール会の会員の関係は想像出来る。

もじみさんは昭和二十一年九月まだ小学校五年生だった長男の顕一君をかしらに厚生君、誠之君とはるかちゃんの四人の幼児たちを連れて郷里隠岐島五箇村の実家まで死ね思いで引揚げたのだった。

（次号につづく）

7期生卒業30周年記念
同窓会のお知らせ

7期（昭和31年卒）の同窓会を下記により明年盛大に開催したいと思います。1年後ですが、今からご準備下さい。

記

- とき　昭和61年8月16日（土）
- ところ　松江市千鳥町　ホテル一畑

※詳細は明年6月頃ご案内いたします。

松江北高第16期の皆様へ
卒業20周年同窓会のご案内

この度、下記のとおり同窓会を開催いたします。是非お誘い合わせのうえご出席下さい。

記

- 日　時　昭和60年8月11日（日）午後6時より
- 場　所　ホテル宍道湖（松江市西嫁島）
- 会　費　8,000円

※担任の先生方にもご案内しております。
※なお、当日午前9：30スタート、松江カントリークラブにてゴルフコンペも開催されます。

同期会幹事　金平 憲、長谷川 宏、他ルーム幹事

卒業25周年記念
松高10期（昭和34年卒）同窓会開催迫る

懐しの川津校舎を卒業後、25周年を記念する同窓会の開催が間近かになりました。下記の通り開催いたしますので、多数の皆様のご参加をお願いいたします。

- 日　時　昭和60年8月17日（土）午後5時30分より受付
- 会　場　松江駅前東急イン　0852－㉕－1090
- 連絡先　竹内　誠（竹内時計店　0852－㉑－9000　㉒－7000）
  持田重夫（0852－㉒－0820）
  吉野栄悦（08526－②－0507）

「双松」名簿発刊間近か

五年毎に改訂しております「双松」名簿は、来る十月発刊に向けて、ただ今、最終的な作業に入っております。各期の役員の方を中心に、格別のご協力をいただき、今回は五千数百部の予約を既に頂いており、大変喜んでおります。**十月中旬から順次、お届けする予定にしておりますので、今しばらくお待ち下さい。まだ予約をなさっていない方で、購入を希望されます方は事務局あてお知らせ下さい。**

また、今春の人事異動などで勤務先あるいは現住所に変更のあった方は大至急ご連絡下さいますようにお願い致します。

事務局（校内幹事）の転出入

昭和六十年四月の人事異動

転出

田村　淑子（実助）高8期
本田桜紀恵（体）高12期
藤井　徹（事務）高29期
松本　尚子（事務）高31期

転入

長谷川正矩（国）高8期
北尾　哲也（英）高25期
野々内敬子（英）高26期
仙田　睦子（事務）高31期

編集後記

いつ止むとも知れず降り続いた雨もやっと上り、山陰・赤山の地にやっと夏らしい気配が感じられるようになりました。

「双松」名簿発行の準備、「双松」会報六号の発行と事務局は慌ただしい毎日でしたが、ご多忙中にもかかわらず原稿をお寄せいただいた各位のご協力によって、本日会報をお届けできましたことを心から感謝申し上げます。

名簿の作業を通じて、松中・松高・北高と百余年の伝統の重みを改めて痛感いたしました。他を圧するがごとくその勇姿を誇る双松は、まさしくこの伝統を見現したものと思われてなりません。来年は創立百十周年の年にあたり、記念事業、記念行事の準備が始まりつつあります。

卒業生の皆様の、一層のご活躍とご発展を祈っております。